「愛の血液助け合い運動」月間（7/1～7/31）に寄せて

沖縄県赤十字血液センター 献血推進課　野原　康功

はじめに

平成23年3月11日に起きた東日本大震災で被災された方へ深くお見舞いを申し上げます。

災害発生直後から各地で義援金の募集に加え、全国の献血ルームや移動献血バス等において大変多くの方の献血へのご協力を頂きましてありがとうございました。東北地方の血液センターの業務は今現在も完全復旧とはいかない状況にあります。県民の皆様へは引き続き東北地方への支援を含めてのご協力をお願い申し上げます。

今回は日頃から皆様にご協力頂いている献血業務について少しばかりお話したいと思います。

献血基準改正

まず、献血の種類についてお話したいと思いますが、献血には大きく分けて全血献血と成分献血の2種類があります。全血献血とは血液を200mL若しくは400mL採血するもので、200mL献血は16歳からご協力頂く事ができます。主に移動献血バスで行っているのは400mL献血です。400mL献血はこの4月に献血基準の改正があり、これまでは18歳以上の男女から献血可能としておりましたが、17歳の男子についても採血が可能となりました。成分献血は沖縄県では那覇市久茂地にある久茂地献血ルームで受け付けており、血小板や血漿という血液中の特定成分のみを献血頂くもので、献血者の体への負担が少ない献血となっております。また成分献血の基準についても改正があり、これまで血小板献血については男女とも54歳までしかご協力頂けなかったのですが、男性については69歳までに延長されました。（但し、60歳から64歳の間に献血経験がある方に限ります。）

献血推進課業務（日程調整）

沖縄県での献血は久茂地献血ルームか移動献血バスでのいずれかでのご協力になりますが、私の業務は、移動採血バスの配車の日程調整を主に行っております。

バスの日程調整を行う際、手当たり次第にご協力頂けそうな団体を探して調整するのではなく、年間で不足する時期や、協力団体の献血を頂き易い時期等も考慮し、バス1台を1日稼働して400mL献血で50名のご協力を目標としております。

献血協力団体は企業、学校関係、地域など様々あり、前年同月頃に献血ご協力を頂いた団体へ電話で都合を伺いながら日程調整を行います。沖縄県の移動献血バスが伺うエリアは、北は国頭村から南は石垣市まで及び、献血協力依頼は、献血協力団体の要望を極力反映できるように調整します。しかし、1団体で400mL献血で50名達成が可能であれば良いのですが、1か所で10名程の献血協力者などの場合、2～4か所の団体を組み合わせ目標である50名を達成できるように調整します。そのため全ての協力団体の日程について希望の日時で調整ができないという心苦しい場面が多々あります。目標を達成する事によって県内の医療機関に安定的に血液を供給する事が出来るという事になりますので、予定人数がきちんと採血できるかどうかという事が重要であり、それを考慮の上、献血現場においての機材の設置時間、撤去時間等また、各所間の移動に無理が無い様団体の献血

実施時間を設定します。日程調整を行う上での沖縄特有な事は、旧正や旧盆など旧暦の行事に当たる日は会社自体が休みか、業種によっては忙しくバスを配車してもほとんど協力が得られないので、配慮が必要です。

献血推進課業務（事前推進）

日程調整後は団体担当者に面会し、職員への周知用のポスター・チラシをお届けします。その時には近隣の事業所などにもポスターやチラシを配布し、より多くの方が当日献血にご協力頂けるように広報を行います。献血協力が初めての団体については実際にバスの駐車スペースの確認と、そこに行き着くまでのルートを確認します。ありがちなのが協力団体の駐車場は広くて大型バスの駐車が可能ではあるが、そこに行き着くまでの道路で街路樹や障害物がありそこに行き着く事が出来ないという事がありますので、現場まで大型バスが本当に通行が可能かを確認します。このような調整を実施日の1か月から2か月前に行い、実施日の2、3日前に協力団体の近隣事業所等へ最後の献血協力の呼びかけをして回ります。献血当日に1人でも多くの方が献血現場に来て頂けるように直前まで、広報をする事が目標を達成し、血液の安定供給に繋がります。その後、実際に現場に向かう移動班へと引き継ぎます。私の主な業務はここまでになりますが、その後の実際の献血にて事前に呼び掛けを行った近隣からの協力や前回より周知活動を徹底する事により献血実績が上がったりした時などが、とてもこの業務にやりがいを感じます。

献血推進課業務（移動現場）

移動班は事務員、看護師、医師で構成され1班6名～8名体制になります。移動献血バスは基本的に自己完結型で業務を行えるようにできております。現在、献血は全国統一システムを導入しており、いつ、どこで誰がどのような献血をしたのか等の情報がオンラインで全国どこでも照会が可能です。そのパソコン等の電源もバスには発電機が搭載されており、外部電源を引かずに業務を行う事ができます。移動班は毎朝早くに当日の必要物資をバスに積み込み出発します。年に2回、宮古・石垣へもバスと共に渡り約一ヵ月間献血を行いますが、その期間中は職員が宿泊し1週間交代で業務を行います。沖縄といえども真冬の外での献血業務は大変厳しく、また真夏は日陰にいたとしても汗が止まらないという大変な業務ですが、そのような状況でも血液が必要な方の為にと献血に来て下さる皆様には大変感謝する次第です。沖縄センターとしても少しでも皆様に良い環境でご協力頂けるように、できる限りの基盤整備できたらと思います。

おわりに

ご承知のとおり近年は少子高齢化で、血液の使用状況は年々増加し続けております。しかしながら献血協力者は年々減少し続けております。その中でも特に10代・20代の献血協力者の減少が著しく、沖縄県で使う血液量を平成10年頃から自県で確保ができない状況にあります。血液不足が生じた際は、九州各県から貰い受け医療機関に供給している状況ですが、沖縄県は離島県ですので、血液搬送には航空便を使用します。本土であれば陸続きですので、いつでも近隣県から不足血液を陸送可能ですが、沖縄では夜間にそのような事態になった場合、患者さんの命を危険にさらしてしまう可能性がより高くなります。そのような事から沖縄県はこの慢性的な血液の輸入県から脱却し、自県で使用する血液は自県で確保しなければならないという事をより多くの方に知って頂き、特に若い方々の献血への参加が広がればと思います。また、医療機関にて実際に血液を扱う医療関係者各位におかれましては、輸血を受ける患者へのインフォームドコンセント（輸血の必要性の説明）の際に献血のしくみと献血者の善意についてもお話下さいますようお願い申し上げます。